

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第20号

平成18(2006)年3月11日発行

企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史的資産調査会

専務局：財団法人横浜まちづくり産業文化振興財団内

〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1

TEL.045-225-2171 FAX.045-225-2172



横浜山手聖公会 写真撮影：米山淳一

再生した聖堂 —2005年・横浜山手聖公会—

関 和明

(関東学院大学教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

2005年11月5日、10ヶ月前の1月4日に火災によって大きな被害を蒙った横浜山手聖公会聖堂の復興完成を記念する行事が行われた。

周知のとおり聖公会の建物は、山手のランドマークのひとつとして市民に親しまれており(たとえば、筋向いの元町公園からこの建物を写生する人も多い)、1990(平成2)年に横浜市認定歴史的建造物とされている。ほぼ1年前の新年早々、事件のニュースは多くのひとびとに衝撃を与えたことであろう。また、横浜市が認定した歴史的建造物で、このような事態に遭遇した前例もなかった。かつての姿を取り戻した横浜山手聖公会について、再生の過程を概観してみたい。

この建物は、震災で崩壊した前身建物(J.コンドル設計)を建て替え、1931(昭和6)年に復興新築されたもので、横浜には数多くの作品を残したアメリカ人建築家J.H.モーガンによって設計された。1945(昭和20)年、横浜大空襲によって大きな被害を受けたが、1947年には屋根や内装などの戦災による被災部分を修復して聖堂として蘇った。

1990年に認定された後、保全活用計画に基づいた

外壁や屋根の補修、さらに耐震改修などを経てきたが、そのたびごとに、所有者と行政担当者との協力体制が維持されてきた。今回の復興再建に当たっても、信徒の方々によって組織された「聖堂復興委員会」に対して横浜市都市デザイン室と歴史的資産調査会が協力、助言する体制が作られ、修復工事のための「復旧計画検討調査」の結果を踏まえた復旧設計の検討を経て、5月から工事が開始された。

工事は外観復旧と主要構造材である鉄骨トラスの補強を主としたが、これに加えて、祭壇背後の東側壁面開口部を「創建時の状態への復元」する件についても検討が行われた。戦後の応急的な補修の際、中央の三連縦長尖頭アーチとその両側にある開口を塞いだことは、古写真などの資料によって明らかであったからである。ただし、この「復元」は火災による復旧の範囲を超える上、繰り返し行われた現場調査でも、関連する部位の仕様を詳細に確認できる資料を得ることはできなかった。結果としては祭壇背後にはスタンドガラスに代えて色ガラスがはめ込まれた五連のアーチ型開口部が「復元」され、さらに内装全体も創建時に近いイメージに変更された。したがって、建物内部の印象は以前

とは大きく変化した感がある。ただ、「保全活用計画」は景観的な観点から建物の外観保全を主旨とするので、「復元」された東面開口部は認定部位には含めないことに変更された。

「再生」という言葉は、キリスト教の教義において、キリスト自身の再生=復活に繋がる深い意味をもつ。また、キリスト教に限らず、世界中の伝承や神話においても、「再生」は鍵となる重要な概念のひとつになっている。他方、既存建物の「保存・再生」は、対象を特別な歴史的建造物に限らず、リノベーション、コンバージョン、レストアロなどといったカタカナ言葉の流布と並行していま流行現象になっているようにおもわれる。また、地震や台風などの自然災害で損傷し、「再生」が危機に瀕した文化財や街並みなどについてのニュースもよく耳にする。

幸いにも比較的短期間で「再生」された山手聖公会の建物には、復興事業を推進したひとびとの想いと、この建物を巡る数々の困難とその克服の歴史が、さらに厚く包みこまれることになった。多くのひとびとから親しまれる地域のランドマークとして、これからも生き続けることを願いたい。

横浜市認定歴史的建造物に、インド水塔や震災復興橋梁など3件を認定—認定件数は73件に

インド水塔 —山下公園のエキゾチック・フォリー—

吉田綱市

(横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

山下公園の北の端のほうにあるインド水塔が、平成17年に横浜市の認定歴史的建造物になった。用途は水飲み場なのだが、その形がたいへんユニークでエキゾチック。おおむね、イスラム寺院のモスクの中庭にあるハウズ(泉亭)に似ていて、インド・イスラム風のモニュメントと言っていと思うが、ヒन्दウ教や仏教の寺院のモチーフも用いられているようで、その造形の出自の探索が楽しい。

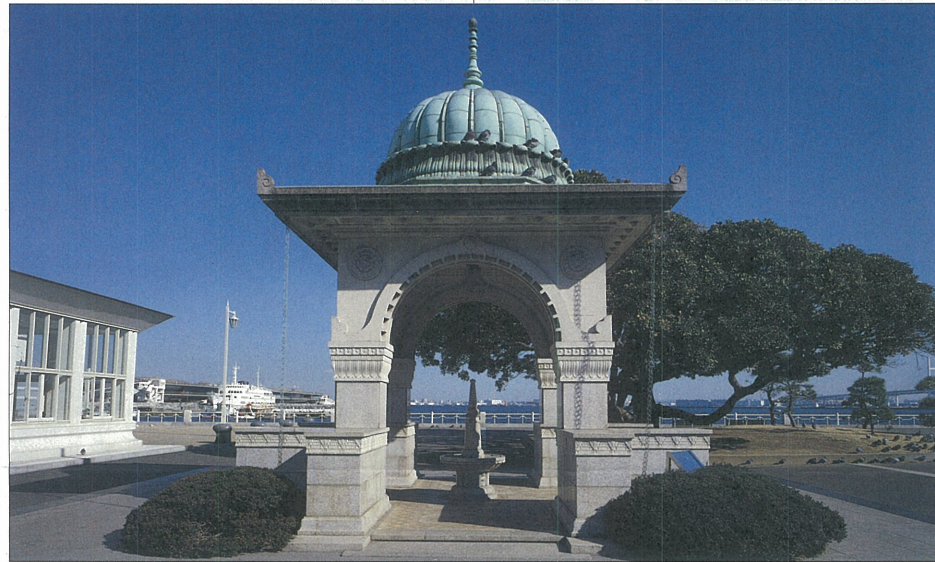
そもそも、この施設ができるきっかけとなったのは、昭和12年に横浜インド商組合が関東大震災の折に同胞が受けた恩義に報いるため「水呑台一基」の寄贈を横浜市に申し出たことである。震災の際、横浜市が外国商人の救

済措置を積極的に講じたことへの返礼である。寄贈の申し出は震災後かなりの年月が経っているが、インド商組合が真に復興するのにそれだけの時間が必要だったということであろうし、長期間恩義を忘れなかったということにも胸が熱くなる。その心うむ申し出に答えて設計をしたのが市の建築部長であった鷲巢昌(1892—1982)。大正8年に東京帝国大学を出て、横河工務所、同潤会、そして再び横河工務所を経て昭和9年に横浜市に入って四代目の建築課長となり、初代の建築部長となった人である。経歴からして、設計の経験は豊富だったろうが、インド商組合の人たちの要望によく応えて、施工を担当した清水組とともに独特のモニュメントをつくりあげた。

ところで、この施設の竣工については、昭和14年と15年の二説があり、いまもどちらともいえない微妙なところがある。施設の市への引渡し式典が行われたのは昭和14年12月18日で、これは当時の横浜貿易新報に出ているから間違いない。しかし、清水組の「工事竣工報告書 インデアン・パヴリオン新築工事(水呑場)」(原田こずえ「インド水塔のこと」『郷土よこはま』132号、平成10年12月20日、所収)は、引渡しを昭和14年12月17日としつつも、工期を「実際起工昭和14年7月13日 竣工昭和15年9月23日」とし、備考欄に「設計変更ノ為メ工期延長ス」と記している。つまり、昭和14年12月には一応の完成を見たのだが、その後なんらかの手直しがあり、本当の竣工は翌15年9月ということになりそうである。横浜貿易新報の写真は、少なくとも外観は今日と同じ姿をとらえているから、手直しは小規模にとどまったものと思われるが、手直しのあったこと自体が、この施設の完成度の高さを物語るものといえるであろう。そのおかげか、ほとんど当初の姿のままいまも建ち続けているわけである。

インド水塔は、それ自体が震災復興の産物である山下公園の、もう一つの震災時の心あたまを国際交流のエピソードを伝えるモニュメントである。それだけでも貴重だが、景観形成要素としてもまた重要。その築地本願寺のミニチュアともいえるユニークな外観は、公園内の点景としてのパビリオン、あるいはフォリー(特に用途

はなく、専ら視覚的な効果を増すために設けられた庭園内の構築物)のような役割を果たしているのである。



インド水塔 写真撮影:米山淳一



ガラスモザイクの天井 写真撮影:米山淳一



谷戸橋

かつての谷戸橋は水町通筋に位置していたが、震災後の昭和2年(1927)、現在の本町通筋に横浜市の設計により架け直された。横浜市施工の震災復興橋梁は141橋あるが、そのうち鋼アーチ橋は4橋であり、幹線道路に架けられた。アール・デコ調の親柱をもち、山下町と元町の結節点に位置する数少ない震災復興期の鋼アーチ橋の一つであり、重要な景観構成要素となっている。



西之橋

明治26年(1898)にトラス橋に架け替えられた西之橋は、関東大震災により橋面が焼失し、古材を旧鉄橋(現浦舟水道橋に移設)に転用した。そのため、震災復興事業において内務省復興局によって大正15年(1926)に架け替えられたのが現在の橋である。国施工の震災復興橋梁は37橋あるが、そのうち鋼アーチ橋は3橋である。山下町と元町・石川町の結節点に位置する数少ない震災復興期のアーチ橋であり、重要な景観構成要素となっている。

横浜山手聖公会 修復工事の概要



火災直後の屋根の状況

横浜山手聖公会の修復の検討にあたり、(株)東京ソリリサーチにより構造調査が行われ、火元である事務室のRC天井スラブの補強が必要なことと小屋組鉄骨トラスに戦災時のものと思われる変形はあるが、補強をすれば再使用が可能と確認された。修復計画は火災前の状態に復旧することを基本に、教会、関和明関東学院大学教授、市により検討が進められたが、教会の強い要望により、内部については可能な範囲で創建当初のイメージを復元することになった。

外観については火災前の現状復旧を基本とするが、課題となったのは創建当初にあった東側壁面開口部の復元であった。開口部跡に埋められていたレンガを取り外し、痕跡調査を行った

が、RC躯体に窓枠が取り付けられていたと思われる溝などの痕跡はあったものの、窓枠部材は見られなかった。山手聖公会の他の窓やモーガン設計の他の建物の仕様調査も行ったが、確認は得られず、教会が所有する戦災前及び戦災直後の数点の写真資料から窓枠の形態のみを復元することになった。

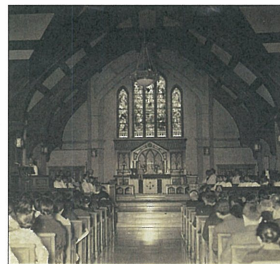
修復工事は(株)関工務店の設計・施工で行われ、屋根のスレート瓦は極力、既存材料の再使用を図ったが、数量が足りないため身廊部分はスペイン産の新しいものを使用した。

◎横浜山手聖公会の概要

所在地 横浜市中区山手町235
 建築年 昭和6年(1931)
 設計者 J.H.モーガン
 規模構造 鉄筋コンクリート造、地上1階(一部3階)一部地下1階
 外壁は大谷石、屋根は天然スレート
 建築面積 497.64㎡ 延床面積 643.5㎡
 横浜市認定歴史的建造物(認定年月:平成2年3月)

◎経過

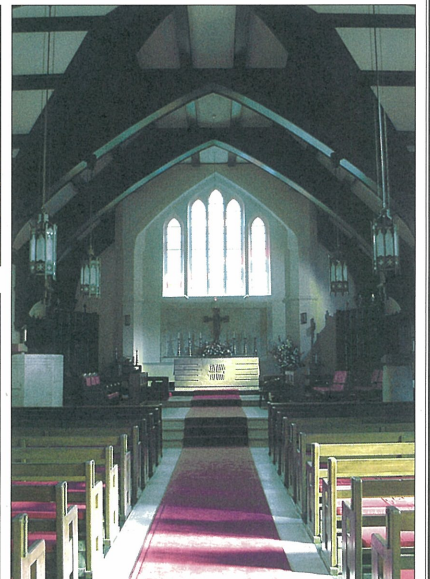
1月4日 火災発生
 1月9日 教会が「聖堂復興委員会」を設置
 1月~3月 専門家等による被災状況の詳細調査、修復内容の検討
 4月10日 教会信徒総会にて修復方針・募金計画等承認
 4月~5月 施工業者の選定、設計及び工事準備
 5月23日 足場設置等の準備工事に着手
 7月~8月 東側壁面開口部復元計画検討調査
 10月31日 工事竣工
 11月5日 横浜山手聖公会聖堂復興感謝礼拝



戦災前の聖堂内部 提供:横浜山手聖公会



戦災直後の聖堂内部 提供:横浜山手聖公会



復興した聖堂内部

横浜地方気象台庁舎

—山手の「風の塔」—

吉田綱市

(横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

山手の外人墓地の向かいにある横浜地方気象台庁舎が、平成17年に横浜市の文化財に指定された。昭和2年に建てられた建物で、80年近くも現役の気象台として働き続けて来ており、いまま最新のIT機器が刻々の気象現象をとらえて絶えず情報を発信している。しかし、さすがに少し手狭になっており、平成15年から増改築が検討されてきた。間もなくその増改築工事が始まるが、内外観とも当初の姿を驚くほどよくとどめるこの庁舎のそのままの保存を意図して文化財指定がなされたわけである。

建物のみならず、外構の石積みの擁壁も文化財に指定されている。この擁壁は、山手が外国人居留地であった時代にしばしば用いられたいわゆるブラブ積みでできており、良好な景観への寄与が大きいからである。さらには、最近、増築予定部分に、いまま豊かな水をたたえている煉瓦造の深い井戸が見つかった。気象台の場所には、

かつて米海軍病院があり、この井戸はその病院の井戸だったと見なされている。山手に水道が引かれたのは明治31年、それまでは井戸が用いられていた。この井戸は、フランス山公園に保存されているものフランス領事館邸の井戸とともに、貴重な居留地時代の遺構ということになり、その保存策が検討されている。

もちろん、建物自体も大変貴重で、名古屋地方気象台(大正11年)、茨城県石岡市の地磁気観測所(大正14年)に次ぐ日本で3番目に古い気象台関係の建物であり、この二つがどちらも平屋であるのに対して3階建て地下1階、戦前に建てられた現役の気象台庁舎としては最大規模を誇る。設計は神奈川県営繕管財課であるが、これは当初、この建物が神奈川県測候所として建てられた県の施設だったからである。施設が県から国へ移管されたのが昭和14年。この建物に関しては、設計図面、入札書、

契約書、出来高査定書など、当初の設計・施工関係資料が神奈川県公文書館に保管されていることが近頃わかり、それによって実際の設計担当者もわかった。それは繁野繁造というちょっと面白い名前の人で、大正12年に日本大学高等工学校(現日大理工学部)を出ているから、設計当時は大変若い。震災復興期の県営繕は、県庁の設計をはじめたくさん仕事を抱えていて、若い技手にもやりがいのある仕事が多かったのであろう。総じてシンプルで意匠の中に、玄関周りのアール・デコ風の造形など、当時の先端的な意匠も試みており、この技手は期待によく応えたといえる。施工は出水組で、現在の大阪・吹田市に本拠を置いていた中堅の施工会社である。震災を期に機敏に東京に出張所を設けたらしく、並みいる大手を退けてこの仕事を首尾よく落札している。この建物は、いわば新進の設計・施工者によって生み出された作品ということになるであろう。

気象台や天文台というのは、広大な天や宇宙を相手にする施設だから、なにかしらロマンを感じさせる。横浜地方気象台は時計台の塔屋もあることだし、古代ギリシアの気象台たるアテネの「風の塔」にならって、これを山手の「風の塔」と呼びたいと思う。

横浜地方気象台整備事業の概要

◎横浜地方気象台の概要

| | |
|------|---|
| 所在地 | 横浜市中区山手町99 |
| 建築年 | 昭和2年(1927) |
| 設計者 | 神奈川県営繕管財課(担当 繁野繁造) |
| 施工者 | 出水組 |
| 構造規模 | 鉄筋コンクリート造、地上3階・地下1階 外壁 入道石洗い出し仕上げ、屋根 陸屋根アスファルト防水 建築面積 231㎡ 延床面積 737㎡ 横浜市指定有形文化財(指定年月:平成17年11月) 附 煉瓦積みの擁壁の外構 |

◎整備事業の概要

| | |
|---------|--|
| 事業主体: | 国土交通省関東地方整備局 |
| 整備方針: | ①既存建物を保存しながら地盤検査して再整備する。 ②山手地区の歴史と景観に配慮し、まちづくりと連携する。 |
| 増築計画: | 鉄筋コンクリート造、地上2階・地下2階 延床面積844㎡ |
| スケジュール: | 15年度 保存検査計画及び地盤調査 16年度 保存検査計画及び基本設計(設計者:安藤忠雄建築研究所) 17年度 保存検査計画及び実施設計・工事発注 19年度 完成予定 |



横浜地方気象台庁舎



ブラブ積みの擁壁



整備イメージ 提供:国土交通省関東地方整備局

日本大通りでオープンカフェ



オープンカフェの風景



オープンカフェの風景



graf media gm : YOKOHAMA

開港以来の歴史と風格を備える、都心部のシンボリックな街路である日本大通り(中区)では、沿道の事業者などが中心となって組織された「日本大通りオープンカフェ実行委員会」と横浜市が協働して、歩道空間を使ったオープンカフェの社会実験が実施された。沿道の4店舗が出店し、通りの景観に彩りと賑わいをもたらせた。7月下旬からテストランを行い、9月からは本格実験に移行。11月末の終了予定を12月末まで延長して、好評のまま本年度の事業を終えた。今回の実施にあたっては、この風格ある景観にふさわしい、質の高いものをめざすこととし、さらに通りの魅力を高めることが大きな目標の一つとされた。今後も、この実験の成果を踏まえて、オープンカフェ事業がその格調と品位を保ちつつ拡大し、日本大通りが横浜を代表する賑わい空間となっていくよう期待したい。

「ZAIM」ビル(旧関東財務局)を実験活用

日本大通りの横浜公園側にある歴史的建造物・「ZAIM」ビル(旧関東財務局)は、9月28日

から山下埠頭で開催された「横浜トリエンナーレ2005」の関内地区での拠点施設として位置づけ、活用された。これに合わせて、建築物の中庭空間を活用して、トリエンナーレに関連するアートカフェが誘致された。このアートカフェは8月18日から「graf media gm : YOKOHAMA」としてスタートし、オープンカフェ事業にも加わるようになった。カフェをプロデュースするのは、大阪を拠点に活動するクリエイターユニット「graf」。プロダクトデザイナー、大工、家具職人、シェフ、アーティストという異色の組み合わせで、「暮らしのための構造」を考え空間全体をトータルプロデュースしている。近年は奈良美智氏や草間彌生氏など現在美術作家とのコラボレーションも多く、横浜トリエンナーレ2005にも「奈良美智+graf」として作品を出品した。この、アートカフェの参画は、出店店舗のパラエティをさらに広げ、利用者の年齢層や、取り上げるマスコミのジャンルなどに大きな影響を与えた。とりわけ深夜時間帯の利用状況は、これまでの日本大通りのイメージを大きく変えた。

「北仲BRICK&北仲WHITE」オープン

北仲北地区、これまでオフィスとして利用されていた栄本町線に面する2棟の歴史的建造物、北仲BRICK(旧帝蚕倉庫本社ビル)北仲WHITE(旧帝蚕ビルディング)が暫定活用されている。ここにアーティスト、建築家、デザイナー等文化芸術活動に関連するグループ約50組が入居し、創造活動を展開している。

建物が、横浜市の推進する「ナショナルアートパーク構想」の重点地区に立地していることから、今後の本格的な街づくりに向けて、市民や横浜市、そしてこの街を訪れる人々との交流の場、情報発信の場としての役割が期待されている。

北仲北地区では、現在「北仲北地区再開発

協議会」が中心となって当地区の新しい街づくりについて関係者間で協議・検討を進めている。このような中、新しい街が誕生するまでの間、街の営みが途絶えることなく、連続的に活動していることが大切であるとして、今回の暫定利用を行うにいたったものである。本プロジェクトはそれらの活動を通じて北仲北地区における再開発事業の計画期間中も当地区の街の賑わいを継続させつつ、同時に横浜市の進める文化芸術活動を通じた都心部の活性化に寄与することを目的としている。

◎プロジェクトの期間

2005年5月から2006年10月までの1年6ヶ月



北仲BRICK



北仲WHITE



横浜市開港記念会館

「手づくり郷土賞」大賞部門に「ライトアップ・ヨコハマ」

「手づくり郷土(ふるさと)賞」は昭和61(1986)年度に創設され、今回で20回目。地域の魅力や活力を生み出す良質な社会資本や活動を通じた「地域活動部門」に加え、平成2(1990)年度までに、同賞を受賞し、現在も地域づくりに貢献している社会資本を表彰する「大賞部門」が今回創設され、「ライトアップ・ヨコハマ」が選定された。歴史的建造物などにスポットライトをあてる都市空間の魅力づくりを継続して行ってきたことが高く評価されたもの。「ライトアップ・ヨコハマ」は、ヨコハマ夜景演出事業推進協議会が主体となって実施している事業で、施設所有者に対する助成や、パブリック作成などの普及啓発を行っている。平成元年度手づくり郷土賞受賞。

山下町・近代建造物めぐり

—遺構でたどるヨコハマ近代建築史—

青木祐介 (横浜市発展記念館)

近代横浜の建築史・都市史をふり返ったとき、1923(大正12)年の関東大震災は、大きな転換点のひとつである。華やかな赤レンガの建築に彩られた都市横浜は、マグニチュード7.9の激震によって、一日にして廃墟の街と化した。横浜では、震災によって宅地総面積の約80%、全戸数の約95%が被災したが、これは東京を上回る数字である。

写真①は、震災の約1ヵ月後に、横浜中央電話局(現・横浜市発展記念館)の屋上から、山下町方面の被災状況を撮影したものである。手前から右奥に向かって伸びているのが本町通りで、正面に写っているのが、焼け残った露亜銀行横浜支店の建物である。山下町の多くを占めていた木造・煉瓦造の建物は、激震とその直後に発生した火災によって、倒壊・焼失の憂き目に遭った。



①震災直後の山下町 横浜開港資料館所蔵古写真

発見があいつく居留地時代の遺産

しかし、現在でも偶然に震災前の建造物が発見されることがある。山下町では、居留地時代の遺構として、旧48番館の建物の一部および旧91番地の塀が発見され、いずれも文化財指定を受けて保存される運びとなった。

旧48番館(写真②)の場合は、長い間倉庫として使われていた建物を解体している最中に、煉瓦積み壁が発見され、1883(明治16)年に創建されたモリソン商会の建物であると判断された。市内に残る煉瓦造建築としては現存最古である。



②旧居留地48番館

対策が採られていたことを示す重要な発見である。

一方、旧91番地の塀(写真③)は、同地でのマンション建設工事に際して発見されたものである。調査の結果、石積みの腰壁部分の上に煉瓦積み壁が載った構造が確認され、居留地時代の遺構であると判断された。現地では、二段構造がわかるように表面のモルタルを一部剥ぎ取って保存されている。



③旧居留地91番地塀

また同地からは、桜印の刻印をもつ煉瓦やジェラルド瓦の破片が採集された。とくに桜印の刻印については、小菅集治監(現・東京拘置所)製といわれる桜印とは異なる種類のものが確認されている。市内ではこの場所でしか発見されていない珍しい刻印であり、桜印=小菅製だとしてきた従来の研究に疑問を投げかける資料である。

これらに加えて、居留地時代の遺構としては、日本大通の旧居留地煉瓦造下水道マンホール(1881-83年、国登録文化財)や旧居留地消防隊地下貯水槽(1893年、市認定歴史的建造物、写真④)などの土木構造物が保存・整備されている。



④旧居留地消防隊地下貯水槽 資料:横浜市発展記念館

これらは居留地時代

の都市基盤整備をものがる貴重な土木遺構であるが、同時に、明治10年代から20年代にかけての煉瓦造構造物としても、その価値は高い。開港当初の「木と石」による居留地建設の時代が過ぎ、煉瓦という新しい材料が浸透していく明治前期の建設技術が、これらの遺構には封じ込められているのである。

新しい建築構造の登場—震災前の鉄筋コンクリート造建築

明治時代の末からは、煉瓦造に加えて、鉄骨造、鉄筋コンクリート造という新しい建設技術が登場する。その代表的な建築が、遠藤が苑の設計による三井物産横浜支店(1911年、写真⑤)である。建物の躯体すべてを鉄筋コンクリートで建設した日本最初のオフィスビルであり、関東大震災にも耐え



⑤三井物産横浜支店
「遠藤が苑建築写真帖」(横浜市発展記念館所蔵)より

抜き、今も現役で機能している。

遠藤は、以前から鉄筋コンクリートの導入を部分的におこなっていた。写真5の右手に写っている同支店の煉瓦造倉庫(1910年)がそのひとつである。隣接する事務所棟と併せて、こちらの倉庫も現存しているが、ここでは柱・屋根スラブ・窓リントル(上部の水平材)に限定して、鉄筋コンクリートが使用されている。

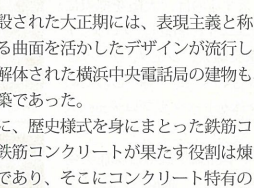
こうした実験的な試用を経て、翌年の事務所棟で躯体全体に鉄筋コンクリートが採用された。横浜における震災以前の鉄筋コンクリート造建築としてはもちろん、日本における鉄筋コンクリート構造導入期の現存遺構としても重要な存在である。

そして構造のみならず、都市景観上の斬新さも忘れてはならない。白い化粧煉瓦を貼りつけた簡素な外観は、のちのモダンオフィスの時代の到来を予見するものであり、現在もその魅力を失ってはいない。竣工当時の写真は、明治の街並みに突如あらわれた、この白くて四角い箱型の建物のインパクトをよく捉えている。

一方、震災前の遺構では、従来の古典主義様式を鉄筋コンクリート構造で実現した露亜銀行横浜支店が現存している(写真⑥)。辛くも震災で焼け残った露亜銀行は、イギリス人建築家ウォード(B.M.Ward)の設計により、1921(大正10)年に竣工したばかりであった。

日本での最後の作品とみられる露亜銀行横浜支店の建物は、玄関や窓の上部に三角形のベディメントを載せ、南面および西面では、2・3階をつらぬくイオニア式の大オーダーを配するなど、全体の意匠は正統的な古典主義様式に則っている。

近代建築の三大材料の一つであるコンクリートは、煉瓦とは違って、その流動性を活かした自由な造形が持ち味である。露亜銀行が建設された大正期には、表現主義と称して、コンクリートによる曲面を活かしたデザインが流行した。震災で被害を受けて解体された横浜中央電話局の建物も、大正期特有の表現主義建築であった。



⑥旧露亜銀行横浜支店

しかし露亜銀行のように、歴史様式を身にまとった鉄筋コンクリート造建築では、鉄筋コンクリートが果たす役割は煉瓦に替わる建物の骨組みであり、そこにコンクリート特有の表現は存在しない。様式は、いわば骨格の上にかぶせられた交換可能な衣服のようなものである。震災後、昭和の街並みに増えていく様式建築は、この外側の衣服をさまざまに交換したバリエーションだといってもよい。その意味で露亜銀行は、現存する鉄筋コンクリート造の様式建築の原点に位置する建物である。

震災復興—百花繚乱の様式建築

関東大震災からの復興過程では、今日も残る多くの様式建築が生み出された。鉄筋コンクリートの躯体の上に展開するさまざまな歴史様式は、まさに百花繚乱の様相を呈する。昭和戦前期は、装飾をそぎ落とした白い箱へと向かうモダンズムが登場する一方で、こうした様式建築の細部がいつそう充実していく時期でもあった。

写真⑦は1930(昭和5)年頃の、復興なった日本大通りを捉えたものである。現在の街並みがすでにこの時点で出来上がっているのがわかる。右手には、手前から三井物産横浜支店(1927年に南側部分を増築)、その奥に横浜商工奨励館(1929年)が建ち、左手には手前から横浜地方裁判所(1929



⑦震災復興後の日本大通り
「第20回関東東北医師大会記念写真帖」(1930年、横浜市発展記念館所蔵)より

年)、神奈川県庁舎(1928年)が竣工している。

この復興期の街並み特徴づけるのが、スクラッチタイルと呼ばれる、表面にスクラッチ(櫛で引掻いた溝)をもつタイルの使用である。昭和戦前期に広く流行したタイルであり、このタイルを見れば間違いなく昭和戦前期の建物と判断できる。ひとつの年代判定要素でもある。写真左側の地方裁判所や県庁舎をはじめ、外装にスクラッチタイルを貼った復興建築は枚挙に暇がない。

この写真には写っていないが、横浜公園から日本大通りに入る角に位置しているのが、旧日本綿花横浜支店である。三井物産と同じく、事務所棟と倉庫の両方が現存している(写真⑧)。関西の様式建築の名手、渡辺節の設計により、1928(昭和3)年に竣工した。スクラッチタイルで仕上げら



⑧旧日本綿花横浜支店

れた外壁に四角い窓が開けられた、シンプルな壁面構成ながら、玄関周りや頂部のコーニスには、渡辺節の本領発揮と言わなければならない細部装飾を見ることが

できる。1930年頃には、横浜市の震災復興も一段落を迎えようとしていた。震災以来、復興の中心となって活躍したのが横浜市建築課の技師たちである。彼らの手によって建てられた公共建築群の最後の華が、横浜商工奨励館(現・横浜情報文化センター)である(写真⑨)。

外観は、凹凸のない擬石仕上げの2・3・4階に対して、1階部分を石張りとするので、建物に重厚感が生まれている。玄関周りは、八角形窓をはじめとする幾何学的なアール・デコ風で、1階ホールでは、中央階段の柱上部の持ち送りに独特の装飾が味わえる。

この工事をピークとして、当時100人以上の職員を抱えていた建築課は、以後、規模を大きく縮小する。震災復興を支えた技師たちは、次々と職を離れ、それぞれの道を歩んでいった。

市内に残る近代建築を紹介した『都市の記憶 横浜の近代建築』が刊行されたのが、1991(平成3)年のこと。今、同書を開いてみると、山下町にあった近代建築もずいぶん無くなってしまっている。その一方で、旧48番館のような居留地時代の遺構が発見・整備されるなど、『山下町の記憶』を残し伝える作業は、現在も進行中である。



⑨横浜商工奨励館 横浜市発展記念館所蔵絵葉書